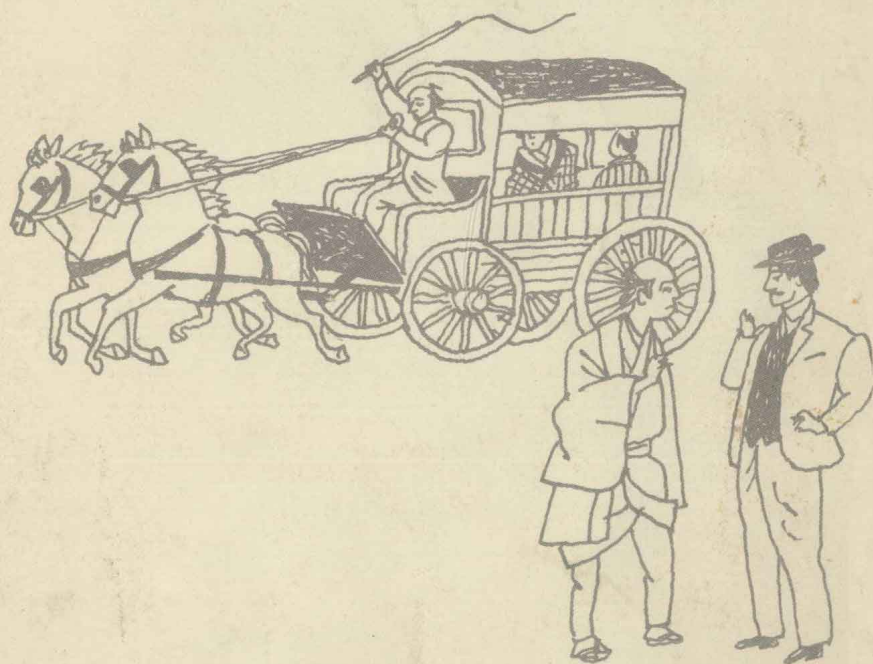


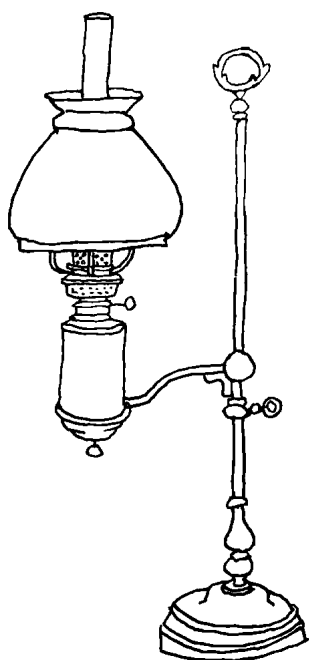
ぴいひゃらどんどん

青島幸男



らとんとん

青島幸男



新潮社版

ぴいひやらどんどん

定価八八〇円

一九八三年五月一日印刷
一九八三年五月五日発行

著者 青島幸男

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(266)五一一(業務)

振替 東京(266)五四一一(編集)
東京 四ノ八〇八 千一六二

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yukio Aoshima, 1983, Printed in Japan.

ISBN4-10-338803-X C0093

目次

天盃頂戴

5

薰風駘蕩

39

波濤萬里

73

戀歌争鳴

105

落花流水

139

夏花冬月

169

一路勇往

203

あとがき

240

装
幀・
挿
画
長
尾
み
の
る

ぴいひゃらどんどん

天盃頂戴

一

「どうにもえれえものを頼まれちまって、勝手がわからねえから手に負えねえや」
指物師の弥七がぶつぶつ言いながら、それでも口とは裏腹に、自信ありげな手練れた指使いで切りだしを動かしている。十一月三日の昼下り、油障子を開けはなした、よく風の通る一間きりの裏店で、この季節に頬から首筋へ流れ落ちるほど汗をかいている。年は二十四、鼻の大きなかつい顔立ちだ。指物師とはいえまだ半人前、どこへ行っても親方に素直に従っていけず、しいには喧嘩になって追い出される。今は氣ままに、ご近所の直しものなどはんちくな仕事で裏店暮しのその日その日をおくっている。

「どうも親方とかあにいと、頭ごなしに怒鳴る連中とは肌が合わねえ性で……」

と生意気なことを言っているが、本当は江戸っ子の常で根は弱虫のくせに、向うつ氣ばかり強く、飽きつぼくて辛棒ということがまるでできない。そのかわり好き勝手にやらせておけば、時折りははたが驚くような結構な腕を見せることがある。特に大店を廻って歩く廻り髪結が、梳具や元結などの髪結道具を入れて持ち歩く台箱などを作らせると立派なもので、注文主の要望をよ

く聞き、使い勝手がいいように、扱う者の身になって新しい工夫を凝らしたりするので、遠くから名指しで注文が来ることもある。普段は気さくでつぶれた行燈だの、箱膳の引出しだのを器用に直してくれる。もっともいっぱしの職人風を吹かせて仕事を選んだり勿体をつけたりしている柄ではない。

「こんなもんで勘弁していただきやしようか」

源太郎たちにじつと手元を見つめられていたのが照れ臭いのか、出来上ったものを高く持ち上げて振り廻してみせた。

小ぶりの蛇の目傘を二本、柄を突き合せる形で繋ぎ、継ぎ目の所に齒車を仕掛けたもので、この柄に長い竹竿をつけて掲げ、手元で竹竿をひねると上の蛇の目がぐるぐる廻るといふ細工だ。

「よう立派立派、てえしたもんだよ、流石なもんだ。江戸中広しといえどこんな細工ができるのは左甚五郎か、お前ぐれえしかいやしねえぜ、ねえ若旦那」

同じ長屋で隣り合って住んでいる大工の玉吉がさかんに感心している。こちらは一つ上の二十五、眼と眼の間がおそろしく間伸びしていて見るからにひょうきん者然としている。

「そうよな、団扇だの提灯だの薬玉だのつてのはどこにもあるかもしれないねえが、蛇の目を掲げてしかもお前、それがこう手元の加減でどうとも廻るってんだから、ほかの町内の奴ら眼エむくに違えねえや」

「眼エむくどころか、じつと見てるうち眼を廻すんじゃないか」

玉吉は上眼づかいに一点を見据えて首をうごかし、おどけて眼を廻す真似をしてみせた。

「しかしねえ若旦那、あなたが、勝手に書いた図面を持ってきた時や、全く何のことかわからなかったし、弥七がそれを見てうなづけているの見たも、いってえどういふことかと思つてたけど、

えれえもんですね、こんなものが出来ようとは夢にも思わなかったよ、あつしや」

源太郎もその出来上りには内心びっくりしていた。思いつくまま書いてはみたものの、半分はいい加減に考えていたところもあったのだが、細工は流々仕上げをごろうじろとはこのこと、思ったよりうまくいって、一番びっくりしているのは当の源太郎かもしれない。

「なあ弥七よ、だから俺たちは気が合うんだよなあ。二人そろえば鬼に金棒、出来ねえものはねえや」

鉄色の紬つじまの着物に、金茶の博多の一本独鈷どくこの帯をしめ、古渡り唐棧とうざんの袴纏はんてんをひっかけた源太郎が、きれいにそろった白い歯を見せて笑いながらしきりに弥七の肩をたたいていた。

弥七も出来上りが気に入ったのか、源太郎の言うことに一々うなずいている。

「傘の柄の所から町内の名入りの大幟おおのぼりを吊り下げて盛大にねり歩こうぜ」と玉吉。

「そいつはだめだよお前、柄はぐるぐる廻るんだから旗が巻き上つちまうじゃねえか」

「あつそうか、さすがに若旦那、頭がいい」

源太郎が弥七を見ると、弥七は顎へ手をあててしばらく考えていたが、

「大丈夫ですよ。柄に金輪を通してそいつに下げれば、金輪がすべって幟を巻き上げることはありやせんぜ」

「あつそうか、さすがに弥七は頭がいい」

玉吉はすぐに手を打って今度は弥七をほめる。

「ちえつ、この野郎、どっちへでもすぐ寝返りやがる。それにしてもたいした工夫じゃねえか、おい玉吉、お前の言つた鳳凰ほうおうの代りに幟の頭に生きた鶏をくくりつけて刻ときを告げさせるなんて考

えは、これから見りやお笑い草だぜ」

「全くもって面目ねえ、幟のてっぺんで卵なぞ生れたひにや眼もあてらんねえや」

「馬鹿言うな。おっきな鶏冠とさかつけた鶏が刻を告げたり器用に卵を生んだりするもんか。糞をひっかけるぐらいがおちだぜ」

「違えねえや」

三人は機嫌よく大笑いした。玉吉が、

「隣の奴らは、獅子頭みたいな毛槍をおつ立てて、錦の幟で繰り出すなんて言ってますぜ」
「と思い出したように吐きすてる口調で言つて舌打ちをした。」

「いやだね、錦かい、どういうつもりだい、ええつ、官軍におべっかなんぞ使いやがって、江戸つ子の面汚つらやうしだ。薩摩屋敷のはんぱ仕事でも有難がつてさしてもらつてる奴がいるに違えねえ」
源太郎も苦い顔で弥七を見た。

「半こうみたいな変な野郎が、どこにでもいるんだな。全く胸むねくそが悪くならあ」
弥七もいやなことを思い出したというふうだ。

建具職人で半治という男がこの長屋の奥にいる。年は自称二十七、細面でちよつといい男だが、本人がそれを知つていて鼻にかけるのがいや味になっている。源太郎たちから見ると一風變つていて、仕事は一人前にできるらしいが付き合ひが悪いというのか、素直に仲間に加わつたことがない。何についても必ず文句を言い、こつちが白と言えば必ず黒で、うまく折りあいがついても一言多い。博打ばちはやらないし夜遊びはしない、体に毒だと煙草もやらず、小金を溜めていていたつてけちで奢ちかつたことはない。そのかわり只酒たださけだと青くなるまで呑むという奴で、どうしても源太郎たちとは気が合わない。町内の旦那衆や大家さんにはうけがいいのも腹の立つ種だつた。

半こうの話で三人ともちよつと鼻白んだ気分になったが、すぐに思い出したように弥七が、「それにしても將軍様はどうしちまつたんだろうなあ、三百年も続いた公方様が薩長の芋侍に負けるわけがねえと思つてたけどねえ」

と今でも腑に落ちないといった体で頬をふくらませた。

この正月幕府軍と官軍が鳥羽伏見でとうとう戦争をはじめた。源太郎たちのような町人は、もとより鳥羽伏見がどこなのかも定かには判らず、戦争といったところで、自分が征くわけでもなし、何のための闘いかも知らず、どこか遠くでドンパチが始まつたらしいと、寄席の講釈で聞いた豊臣秀吉の朝鮮侵攻と同じ位のこととしか感じられなかった。まもなく天下の大將軍がこともあろうに薩長の田舎侍に負け、その銃口に追われて、命からがら文字どおり尻に帆かけて海路逃げ帰ってきたという噂がぱつとばかりに広がって、徳川様の御威光に頼りきっていた江戸の人々はびっくり仰天した。

それから江戸中は開闢以来の大混乱となつた。それでなくとも前の年から薩摩の志士などと称する連中が、江戸のあっちこちに火をつけて歩き、おちおち寝てもいられなかった。暮になつて薩摩屋敷が焼打ちにあい、火つけ騒ぎは一段落したものの、今度は焼打ちをした方の旗本御家人の悪いのがやけになつて、将来の不安もあつたのだろうが、軍資金調達などと勝手な寢言を吐いて御膝元で押し込み強盗を働く。源太郎の家は三代続いた伊勢屋という質屋で、たいした資産があるわけではないが、親父などのなほ「間違いがあつては御先祖様に顔むけができない」と、早々に表を閉ざしてひっそりとしていた。源太郎はまたこんな時に意気地を通すとはかり、辻斬り強盗が出るのを承知で吉原へ通つたりしてみせた。

本人は直次郎を気取っているつもりか羽二重の着流しだが、とても吉原でもてる御面相ではな

い。太い眉に小さな金壺眼で子供の頃から渾名は猿、それでも笑うと愛嬌があつて、体も小作りだからひとにいやな感じはあたえない。

股引の内側へ袋をくっ付け、こいつへ二分金をぬい込んで、これなら追いはぎにあつても大丈夫と、肩をいからして鼻唄まじりに町内を出るが、本当のことを言えば、うしろから針で突つかれても飛び上るほどにびくびくしていたのだ。

一月七日に徳川慶喜追討令というものが出たのを源太郎たちが知ったのは、月のなかばすぎだった。將軍様が賊軍として追いかけるというのだから、江戸っ子にとつては天地がひっくり返るような大騒動だ。そのうえ西郷隆盛とかいう武骨を絵にかいたような大將が率いる東征軍が、トコトンヤレトンヤレナと隊伍を整えて東海道を押してくる。二軍に分れた官軍のもう一方は東山道を進軍してともに関東に迫っていると聞いた。

江戸中の人々は明日にも横町でドンパチが始まりはしないかと不安におののき、ただおろおろと立ち騒ぐばかりだった。

いざ鎌倉のその時は、長年の大恩に報いるため一身を投げうって御期待にそい奉らんといい暮していた連中が一番さきに浮き足立って、御三家も御一門もあつたものではない。

やれ譜代の、直参のと肩ひじ突つ張らかして威張つていた幕臣たちの多くは、いち早く荷物をまとめ、持つて歩けないものはたたき売つてわれ先に逃げ出してしまった。

幕府御用達を表看板にして賄賂を使つた阿漕な商売をしていた商人たちの中にも、攻めてくる官軍を恐れて、「私も御一緒にしましょう」などと忠義顔をして店をたたんでそのあとを追うものが出る。真冬の寒風が街路を吹き荒れる最中、まるで火事場のように、江戸を逃げ出そうとする人たちが右往左往して、辻々に頻に高札が立ちお布令が出るが、そんなものには誰も見むきもし

ない。一時は江戸の人間が半分に減ったとも聞いた。空き家になった屋敷に野盜が巢く、狐や狸が餌をあさる有様、まさに御政道は地に落ち、なにがなんだか判らなくなった。

源太郎たちは、逃げ出そうにも行く先はなし、なにも將軍様に肩入れして、官軍に仇をしたわけじゃなし、官軍が攻め込んだできたつて取つて喰われることもねえだろう、と氣楽に考えていた。ことに玉吉や弥七のように、もともと九尺二間の裏店に住んで、宵越しの銭は持たねえと腕一本でその日暮しをしてきた職人たちは、火事になったつて逃げ道はあらあつと暢氣にかまえていた。

悪い噂ほど早く走るといふが、官軍の兵隊つてのはもともと侍じゃねえ、昨日まで薩摩芋の蔓を引っぱつて、かつかつに喰つたり喰わなかつたりの貧乏百姓だつたのが、俄仕立の洋服で、鉄砲打つのを面白がつてるような連中だからやる事が恐ろしい、戦争に勝つととりこにした男はみんな金玉を抜いて薩摩へ連れてつて芋掘り人足にしちまう、逃げ遅れた若い女はすべて兵隊のなぐさみものにするんだという話が、まことしやかに聞こえてきた。東征軍がもう品川のすぐ先まで来ているという時にこの話が伝わつてきたからたまらない。日本橋の魚河岸の威勢のいい若い衆たちが奮い立った。手に手に商売ものの鮪庖丁や出刃や柳刃を持ち出し、柄にさらしを巻いて万一の際には俺たちだけで江戸を守ると氣勢をあげた。

この時は源太郎も、玉吉も弥七も河岸の連中の仲間入りをして、頭のうちから刺し子の火事装束を持ち出し、向う鉢巻で急拵えの竹槍の先を焚火であぶつたりした。「向うつ氣と恐ろしさで齒の根が合わねえほどの武者ぶるい、だけども、本当のことを言ううと俺は何度も小便ちびつたぜ」と玉吉があとでつくづくと述懐していた。正直なところ、源太郎はすでにたれ流していて、口の中もからつからでしぼつても雫も出ないほど水つ氣がなく、乾からびたような真白な顔をしていたものだった。こんな時にも半治はいくら誘つても出てこない。のちに大家に聞いてみると青く

なつて金の隠し場所を探していたということだった。

「おい、早速大家の家へ行つて見せてやろうじゃねえか、何を見せたつてほめたことがねえ大家だが、こいつばかりは驚くぜ」

玉吉が出来上つたものを弥七からうばい取るようにしてささげ持つと腰を上げた。

三人そろつてどぶ板を鳴らして長屋の路地の入口にある大家の家の前に立つた。

「大家さん、ごめんなさいよ」

玉吉が大声をかけると一緒に戸をあけた。

「どうしたい、おい、いい若いもんが三人そろつてに、に、に、に、来やがつて、まああがりな、ばあさんお茶を入れてやりなよ」

この十軒長屋の差配をしている、家主の七兵衛は、年は六十四か五、頑固で口やかましいが人はいい。長屋は源太郎の父親の源兵衛が先代から受け継いだものだが、その先代が可愛がつていたという七兵衛に一切まかせて口出しはしない。

「大家さん、まあ見て下さいよ、弥七が拵こしらえた新式のお飾りですよ」

とせまい入口に氣を使って玉吉がれいものを持ち込むと、手の上で廻してみせた。

「どうです、こいつを竿の先へつけて、こう練り歩こうつて趣向です。ね、たいしたもんでしょう」
「なるほど、こいつ面白おもしろえや、この口クロの化け物みたいなものは弥七、お前の工夫かい」

どうやら大家もひと眼見て氣に入つたらしい。

「へえ、考えたのは若旦那ですが、前に舶来からくの絡繰りの修繕をたのまれまして似たようなものを見たことがありますんで」

弥七は照れながらそれでも嬉しそうだ。

「なんにしてもたいしたもんだ。あ、そうだ、揃いが出来てきてるんだ、まあ見てもらおうか。おい弥七、その風呂敷づつみをといてみる」

源太郎も玉吉も、弥七の手もとを見つめた。中から出てきたのは緋縮緬ひぢりめんの布地だった。

「やだなあ大家さん、揃いつてのは縮緬ぢりめんのふんどしですかい、寒空へむかつて有難くねえね、それとも股引の上からふんどしをしますか」

玉吉がさつそく不平をならす。

「あわてるんじゃないよ、そいつは手拭だよ。当節お前、なかなか縮緬の手拭なんぞ持てるものじゃないよ。そいつで鉢巻をするなり、頬かむりをするなり、揃って手踊りでもしてみろ、他人がびっくりすらあ」

大家はその一枚を引っぱり出すと、頭にかぶつてみせた。

源太郎がそれを見てぶつと吹き出し、

「そりや誰が見ても驚くよ。大家さんがそうやって口をとんがらしてると、どう見ても茹で蛸たこだね、ええつ、みんなでそいつをかぶつて酒をくらつて赤くなったら、茹で蛸の行列だよ、竜宮城へ行つてもなかなか見らんねえ図ですよ」

とまぜつかえす。

「どうでしょうね大家さん、祭りの時の揃いの絆纏の衿へかけるてえやつは」

弥七が口を出した。

「そいつはいいぜ、いなせなもんだ。第一首つ玉の廻りがあつたかくていいや。そうだ、どうせのことなら、半分にたち切つて、半分衿へかけ半分で鉢巻にするつてのはどうでえ」

玉吉がすぐしり馬にのる。

「うるせえ、お前らのようにもののわからねえ人間と話をしても仕様がねえ、明日は何でもこいつで皆頼つかぶりしていけ」

大家は急に怒り出した。

「何だ、いつだって、そうやっていちいちひとの言うことをまぜつかえしやがって、今そうして大きな面^{めん}して家の長屋にいられるのは誰のおかげと思っていやがる。忘れやしめえ、四月二十日にうちの押入れの中でふるえてやがったくせに。一人前の口をきくな、馬鹿野郎めが」

大家は緋縮緬の頬つかぶりをしたまま真赤になって怒るからますますもって茹で蛸そっくりになった。

官軍が江戸城に総攻撃をかけると決めた日が三月十五日だった。総大将の西郷隆盛が大砲の筒先をそろえていよいよ砲撃を始めようとしていた。官軍の大砲は筒が長いし大きいから、びっくりするほど遠くまで弾丸をとばすが、これを扱う兵隊は不慣れなものが多くてどこへ飛んでくるかわからない、もし戦争が始まったら、いづどこへ流れ弾丸がドカンとくるか知れたもんじやない、皆そのことを一番恐れていた。

「そんなにあてにならねえ大砲でよく官軍がいままで勝ってこられたねえ」と言えば、「そりや下手の大砲も数打ちや当るで、なにしろ官軍は物量が豊富だ。博打の元手と大砲の弾丸は、なんたつて余計にある方が勝つにきまつてる」などと源太郎たちはやくそくの当て推量でもしてるより仕方なかった。エゲレスの軍艦までおせっかいにも品川沖にやってきて、おどかしに空砲を撃つたりした。

その後お城の中でどういきさつがあつたのか源太郎たちには本当の理由を知るよしもないが、まず第一に江戸の町を火の海にして、罪のない人々の大多数を死に追いやるのしものびない